ちくまプリマーブックス 20

Always in the Motorcycle Scenes

by Yasuo Manzawa

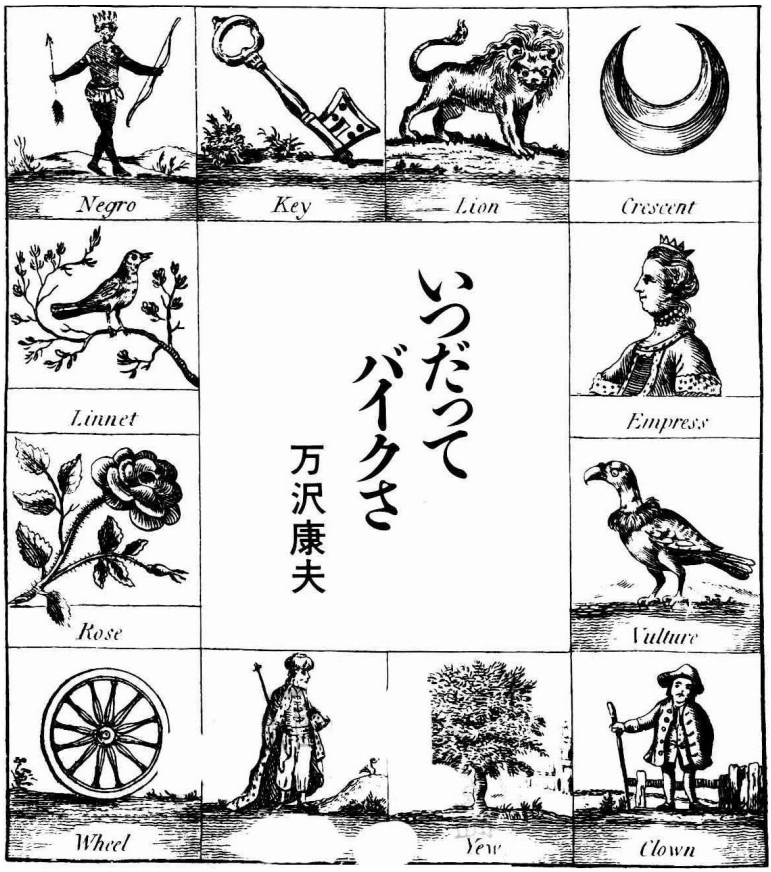
いつだってバイクさ

万沢康夫

What fun the Riding!

筑摩書房

ちくまプリマーブックス 20



いつだって バイクさ

万沢康夫

786／いつだってバイクさ

236pp／19cm／B6判／中学生から

万沢康夫

1947年，東京に生まれる。日本のトライアルの草分けで，自身もトップライダーとして活躍。のち，著名なトライアルを主催し，その普及，発展に尽力するジャーナリストとなる。

1988年7月25日　第1刷発行

著　者　万沢康夫

発行者　関根栄郷

発行所　筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

TEL 03—291—7651(営業)

294—6711(編集)

振替　東京6—4123

装幀者　南　伸坊

三松堂印刷　積信堂製本

© 1988 Y. Manzawa　Printed in Japan

ISBN 4-480-04120-6 C8075

乱丁，落丁本の場合は，御面倒ですが，小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目

次

I　乗れないうちから〝ライダー〟だ

1　初めてなのになぜ乗れた？
一九五九年式山口オートペット5　夜毎のイメージトレーニング10
2　バイクとの幸せな出会い
ピアニストだった父12　染物屋のオジさんに乗せてもらって……16
3　バイクのことなら負けないぞ
配達のアルバイトは無免許運転！21　あこがれはバイクだけ24　できない生徒が先生をやりこめる27
4　遠のいた免許で、つのる思い
ショック！　免許年齢の引き上げ31　断ち切られた思いを自転車に34　自転車屋で覚えたバイクの修理37

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

映画で観(み)た外国のバイク事情41
5 まだまだ時代が若かった
「多摩(たま)テック」ができた！45　本田宗一郎(ほんだそういちろう)さんの理想51
6 自動二輪免許(めんきょ)の首尾(しゅび)は上々？
高校なんか行かない！58　都立町田(まちだ)工業高校61　一発で？　免許不合格62
7 ライディングを覚えた日々
仕方なしの原付(げんつき)免許67　オフロードしか走らない72
II ぼくのバイクは〝トライアル〟
1 ハイスクールライフ
六〇年式ポインターエース79　激突(げきとつ)！　初めての事故83
自分でチューニング・アップ86　修理が遊びだった89
2 胸キュンのツーリングはだれのせい？

黒い瞳がチャーミング 94　胸のなかのモヤモヤ 97

3 灰色にくすんだ日々

ピーターパン症候群 100　あり余る時間をメカに 103

砂利道、赤土をアクセル全開 106

4 自分の足で歩くんだ

勤めたってバイクさ 111　〝トライアル〟初出場 114

これが、トライアル？ 119

5 楽しみは自分たちで作ればいい

手探りの前進 122　「関東トライアル」の誕生 128

6 早戸川の青春は情熱のルツボ

早戸川会場の発見 132　ミックのテクニックは魔法だ 138

ホンダとの契約 143

III ついに見つけた〝ぼくの道〟

1 目からウロコが落ちた
世界一のトライアルに挑戦147　三日目の大転倒150
たった一人の闘い154
2 もっと早く来たかった！
イギリスという国159　他人への配慮162　タテマエとホンネ168
3 エンジョイってどういう意味？
騎士道精神172　トライアルを広めよう178　新しいトライアルに向かって180　「イーハトーブ・トライアル」の開催185
4 バイクの魅力を伝えたい
バイクジャーナリストをめざそう190　「ベストバイク」を中心に194　バイクの市民権198
5 バックギアはついていない！

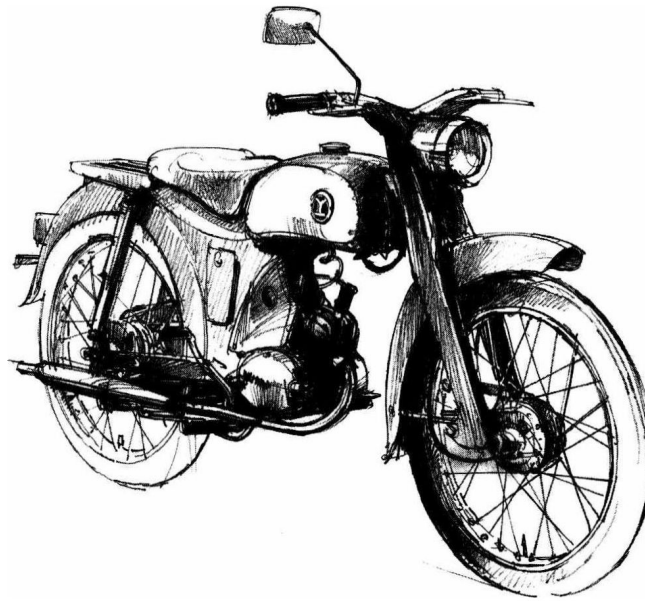
バイクは楽しい時間を作る道具だ202　「トライカーナ」を生みだす212　「SPM」に結集したライダーたち221
ぼくはバイクに生かされてきた224
資料　「トライカーナ」について227
あとがき233

装画　渡辺和博
さし絵　摺本好作

いつだってバイクさ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I 乗れないうちから〝ライダー〟だ



山口オートペット

全長1800・全高880mm　車重54.5kg　最高速度65km/h　空冷２サイクル単気筒　３段変速　50cc

1　初めてなのになぜ乗れた？

一九五九年式山口オートペット

一九五九年、十二歳の暑い夏の夕方のことだった。いつものように新聞配達のために住宅街の坂道を登っていくと、一軒家の新築工事現場にさしかかった。家は骨組みはすっかりできて屋根に瓦をのせているところだった。でも、ぼくの目をひいたのは家ではなく、そのかたわらにとめてある一台のバイクだった。

若草色に塗装されたプレスフレームの車体に薄茶色のサドル（鞍型シート）、タンクの両側はクリーム色で、そこに黒地に金色のYのマークがついた、いかにも実用車その

ものといった印象のそのバイクについて、ぼくはすでにある程度の知識を持っていた。

バイクの名前は一九五九年式山口オートペット。2ストローク50cc、二・八馬力のエンジンは丸っこいデザインで、子ども心にもなんとなく旧式な感じだった。

新聞の束を抱えたまま、ぼくはその場にしゃがみこんでしばらくバイクに見とれていた。黒い鋳鉄のシリンダーからは、ピカピカのエキゾーストパイプがちっともスポーティではないマフラーにつながっていた。バイクの性能を決めるのはエンジンの力であることは雑誌を読んでわかっていたし、同じ50ccでありながらホンダ・スーパーカブは四・五馬力もの高出力なのに、このオートペットときたらそれより一・七馬力も低い上に、アクセル全開で走り続けるとエンジンが焼けてしまうという話もあるくらいに、性能は貧弱だったのだ。

しかし、それを承知の上でなお、一台のバイクが自分のものだったら……という思いがその小さなバイクにぼくを引きつけた。なによりも、その大きさが小学生の身体にも無理なく扱えそうなのがいっそう親しみを持たせていた。思わず知らず、ぼくはオートペットにまたがって、足が地面に届くのを確かめたり、アクセルをひねったり、スピー

ドメーターをのぞきこんだりしていた。
「そんなにバイクが好きか？」
突然、屋根の上から声がした。ドキッとして見上げると、屋根ふきの職人が陽に焼けた顔から白い歯をのぞかせていた。断りもなしにバイクにまたがっていたことを、その職人は気にもかけていないようすで、ぼくは内心ホッとした。
「ウン、好きだよ」
「そうか、乗れるのか？」
「ウン、少しなら」
とっさにぼくはそう答えた。
「そうか、それなら乗ってもいいぞ」
一瞬、ぼくは耳を疑ってしまった。ちょうど休憩時間にするつもりだったのか、職人はスルスルと屋根から降りて、ぼくのそばに立った。
「このなかだけなら乗ってもいいぞ」
と、職人はふたたび家の周りの分譲地を指して言うのだ。

そのころは、日本中どこでも住宅地がどんどん作られていたため、こうした空き地がほうぼうに見られた。さして広いわけではなかったが、このなかをクルクル回るくらいできるさ。なに、あわてることはないんだ。

いきなり降ってわいたようなチャンスをなんとかうまくやろうと、ぼくは胸をドキドキさせながら懸命にそう自分にいい聞かせた。

バイクにまたがると、ライトの左横にある、あまり節度のないエンジンキーを一段だけ回した。二段回すと「夜間走行」で、ライトがつくことも知っていたのだ。右側に突き出したままの不細工なキックアームを踏みおろすと、意外に簡単にエンジンはかかった。いかにも乗り慣れているような印象を与えるように、ぼくは二、三度ブンブンと軽くカラ吹かしをしてから、クラッチレバーを握り、シーソー型のチェンジレバーの後ろを踏んでギアをローに入れた。

アクセルを少しだけ余分に開けてエンジンのチカラを高めながら、クラッチレバーをそうっとはなした。「シロウトはここで失敗してエンストしたり、飛び出したりしやすい……」のは、承知していた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com